夏目漱石博物館

Natsume Soseki Museum

絵で読む漱石の明治

漱石が生活した町、名作を生んだ家……猫、坊っちゃん、三四郎の舞台は、どのようなところだったのか？都市空間から漱石を読み直す！

石崎等・中山繁信——著

彰国社

彰国社

夏目漱石博物館

Natsume Soseki Museum

絵で読む漱石の明治

石崎等・中山繁信——著

はじめに

夏目漱石が、東京大学予備門（のち、第一高等中学校）の予科を終えて専門課程に進むとき、建築科を志望しようとしたことは、談話筆記「落第」に語られている有名な話である。その理由として、漱石は、もともと変人でもあり、建築家という「職業を択んで日常欠く可からざる必要な仕事をすれば、強ひて変人を改めずにやって行くことが出来る」こと、「美術的なことが好であるから、実用と共に建築を美術的にして見ようと思った」ことのふたつを挙げている。こういう実利的な考えを粉砕したのが親友米山保三郎であった。彼は「文学ならば勉強次第で幾百年幾千年の後に伝へる可き大作も出来る」と説き、その助言を容れて漱石は志望を英文学専攻に改めたという。それも途中で変更され小説家に転身したことは周知のことだが、いずれにせよ、ここで建築家の夢は永遠に断たれたのである。

しかし、義弟に建築家鈴木禎次がいたことも影響してか、漱石文学には、他の作家にはみられない建築への興味や美術工芸的なセンスが随所にきらめいている。『行人』の長野二郎の職業は建築家だし、『それから』の長井代助は、自らデザインした洋間の欄間を特注で作らせている。『三四郎』に描かれた東京帝国大学の校舎についての鋭い観察はただものではない、等々。――要するに、漱石は美術や建築が本来的に好きだったのであろう。鈴木禎次はよく名古屋高等工業学校の学生に向かって「夏目が建築家になっていれば文学界における地位以上に、大建築家になったことだろう」と語ったといわれている（網戸武夫『情念の幾何学・形象の作家中村順平の生涯』）が、あるいは当たっていたかも知れない。

また、都会人漱石は、〈東京〉という都市の陰影や都市生活者の文化的土壌を巧みに小説の中に描く抜群の感性の持ち主であった。だからその生涯を追い、作品の舞台について、建築や都市空間の視点から検証してみる試みは充分に意義あることと思われる。われわれは、漱石山房や千駄木の家について、建築学上の正確な知識をもっていなかった。ここに関係者の証言ならびに御協力を得てその全貌がようやく明らかになった。本書が漱石ならびに漱石文学の理解の一助になるとともに、明治風俗や近代建築への興味をかきたてることになるならば、これに過ぎる喜びはない。

なお、絵の一部が推測によっていることをお断りしておく。本書作成には、多くの貴重な資料を参照させていただいたが、それらについては、巻末に「注」「参考文献」として一括掲載した。心より感謝申し上げる。

絵は中山、文・構成は石崎が担当した。引用した漱石作品は、すべて岩波書店版『漱石全集』（全二八巻、一九九三―九七）に拠った。談話については、一部読点を改め読みやすくした。

一九八五年十月　二〇〇六年五月　石崎等・中山繁信

本書は、1985年11月10日に刊行された「建築の絵本 夏目漱石博物館／その生涯と作品の舞台」を一部加筆・修正をしたものです。

装丁――刈谷悠三＋角田奈央＋岡崎真理子｜nesicora

目次

はじめに——三

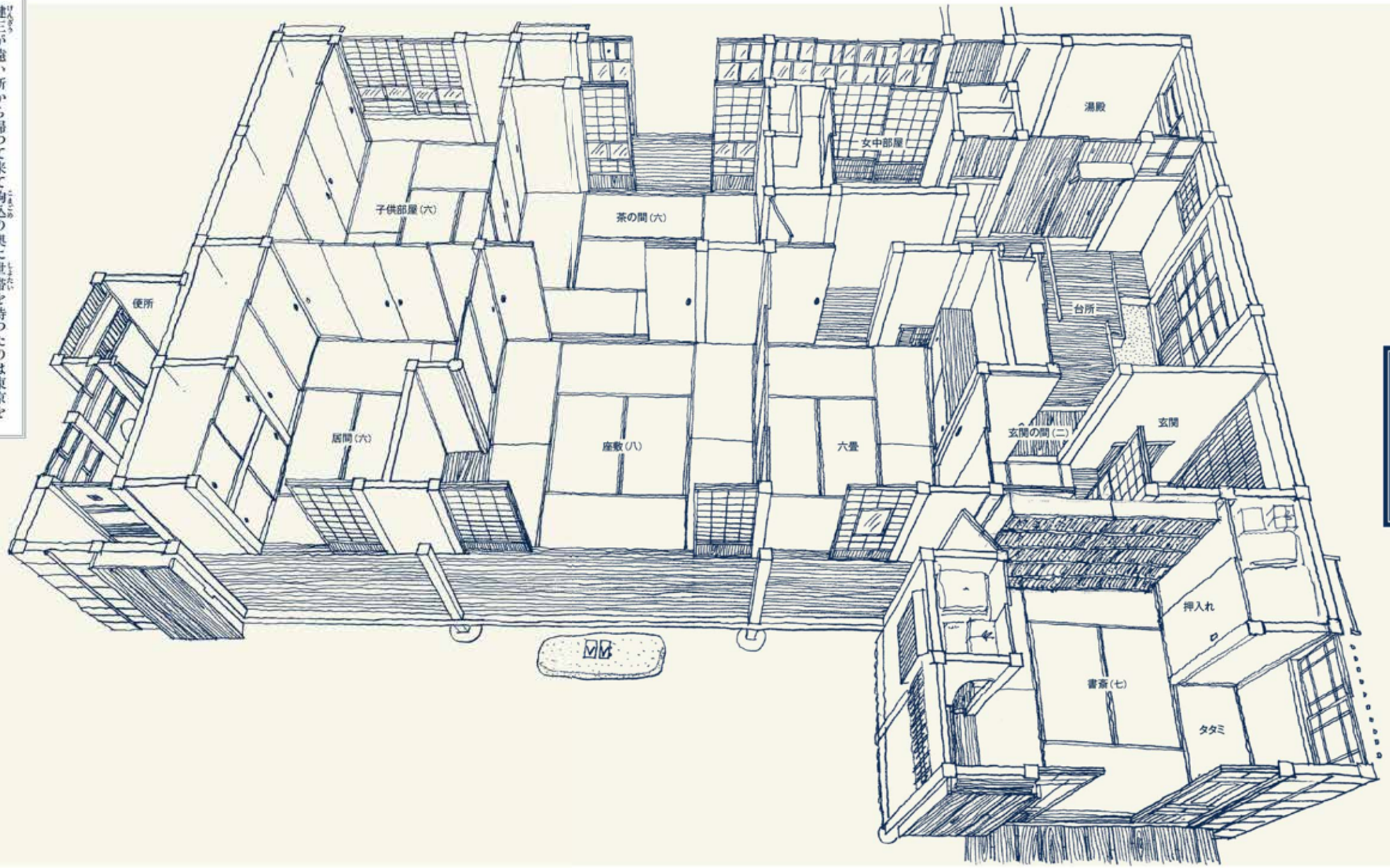
第一章　漱石の生涯——六

喜久井町と夏目坂——一〇
神楽坂——一二
寄席——一三
新富座——一四
お茶の水界隈——一六
お茶の水橋——一八
ニコライ堂——一九
松山中学——二〇
松山での生活（愚陀仏庵）——二一
貴族院書記官長官舎——二二
熊本での生活——二三
五高本館と植物園——二四
千駄木の家——二六
漱石山房（早稲田南町）——三〇
修善寺菊屋旅館——三六
死後の山房・猫塚——三八
墓碑——三九

第二章　作品とその世界——四〇

吾輩は猫である——四四
苦沙彌の家——四四
落雲館グラウンド——四六
銭湯——四八
巣鴨病院——五〇
吾妻橋——五一
吉原——五二
坊っちゃん——五四
伊予鉄道——五四
道後温泉——五五
凌雲閣——五六
野分——五八
奏楽堂（東京音楽学校）——五八
日比谷公園——六〇
虞美人草——六二
東海道線食堂車——六二
新橋ステーション——六三
新橋ステーション2——六四
東京勧業博覧会——六六
勧業博覧会・台湾館イルミネーション——六八
三四郎——六九
東京市街図・東大付近図——六九
池（三四郎池）——七一
電車——七二
法文科大学校舎——七三
赤門——七四
東大図書館——七五
団子坂菊観——七六
甲武線——七八
会堂（本郷中央会堂）——七九
それから——八〇
三越陳列所——八〇
新橋風景と帝国博品館勧工場——八一
砲兵工廠——八二
歌舞伎座と人力車——八四
ビヤホール——八六
門——八七
生活風俗——八七
丸の内・一丁ロンドン——八八
宗助夫婦の借家——九〇
円覚寺塔頭帰源院——九一
彼岸過迄——九二
小川町丁字路と停留所——九二
浅草ルナパーク——九四
明暗——九六
帝国劇場——九六
調度品——九八
注・参考文献——一〇一
おわりに——一〇三

scene—13
千駄木の家



［資料提供：博物館明治村、鈴木嘉夫］

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振ひ落さなければならないと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。

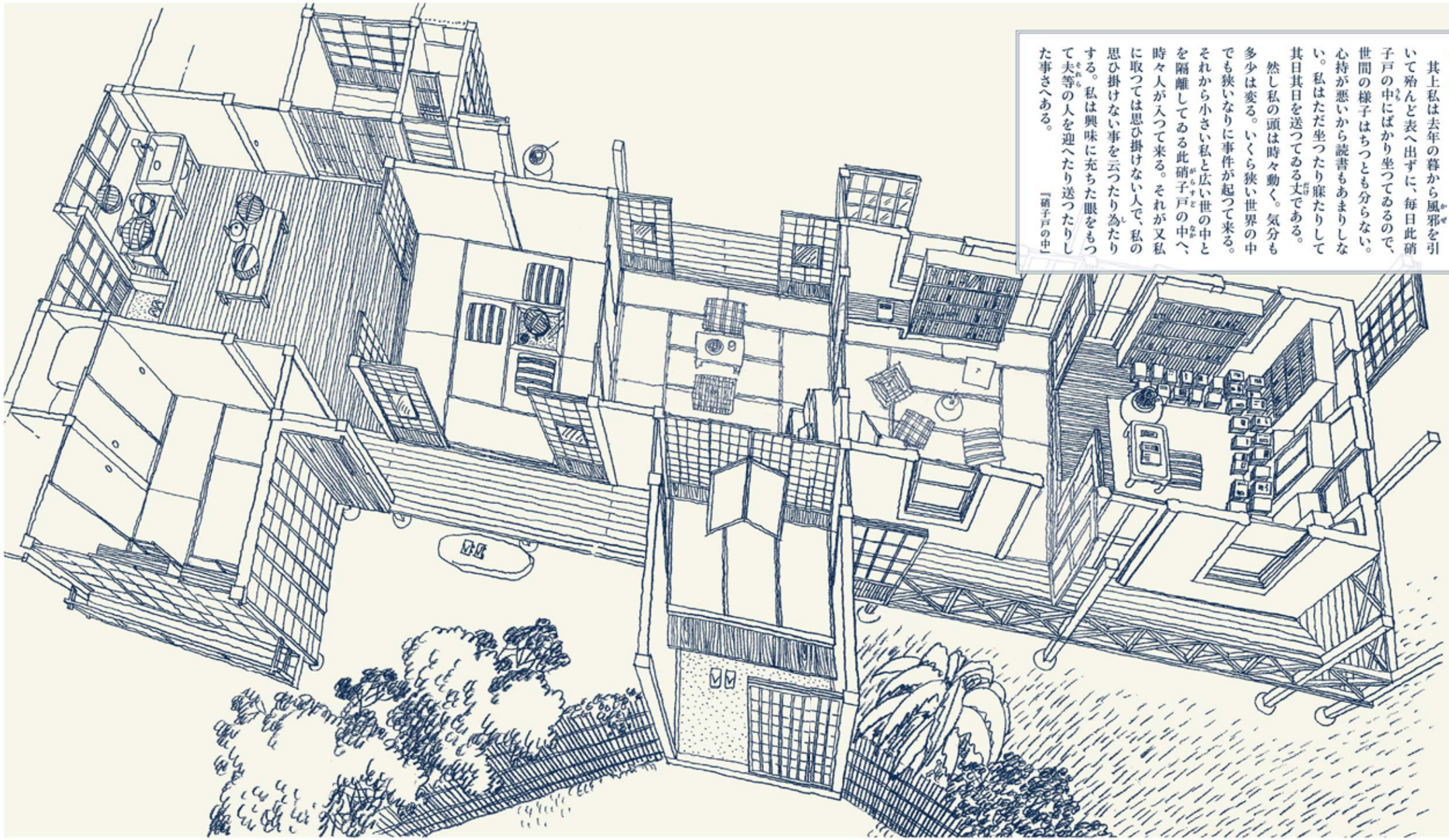
彼は斯うした気分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二返づゝ規則のやうに往来した。

『道草』

明治三十六（一九〇三）年一月、約二年余りのイギリス留学を終えて帰国した漱石は、しばらく鏡子夫人の実家に落ち着いたのち、三月三日、学友で歴史学者の斎藤阿具の持ち家であった本郷区千駄木町五十七番地（現、文京区向丘二―二〇―七）に転居する。漱石が借りることができたのは、阿具が仙台の二高に赴任しており、その間借りていた農業経済学の矢作栄蔵とともに阿具が海外留学の途についたために空家となっていたからである。ここが通称〈猫の家〉と呼ばれるのは、明治三十九年十二月に本郷区西片町十番地ろの七号（現、文京区西片一―一二、一三）に移るまでの約四年の間に、そこを舞台にして代表傑作の『吾輩は猫である』が書かれたからである。

また、この千駄木の家は、明治二十三（一八九〇）年九月から二十五年一月まで、夫人登志子と協議離婚した森鷗外が、生活の一新を図るために借りて住んでいる。その間、『文づかひ』を書き、坪内逍遙と有名な〈没理想論争〉を華々しく展開したが、漱石とこの家との因縁の深さに比べれば、鷗外の場合はそれほどでもない。しかし偶然にせよ、明治の二大文豪が生活したことのある記念すべき建築物であるということで、現在、明治村に移築保存されている。間取りは、七畳の書斎と八畳の客間のほか、六畳の居間と茶の間など全部で七間、それに玄関・台所・風呂場などが付いている床面積三十九坪（一二八・九平方メートル）のその頃としては中級程度の構えである。

ところで、この家は明治二十三年の建築である。建主は牛込の実業家で中島吉利という人物で、医科大学に在学中の息子襄吉の開業を見越して建てたもの。ところが襄吉が卒業後、帝大付属病院などに勤めて開業せず、新築のまま空家同然となっていた。それを鷗外がみつけてしばらく住み、明治二十七（一八九四）年、息子の新世帯のために斎藤阿具の父が購入した。その後、阿具の転任の間、数人が借りているが、帰国後、家探しをしていた漱石が貸家となっているのを知って移り住んだ。野田宇太郎によれば、このとき「漱石の借家引受人となったのは西洋美学者の大塚保治であった[*8]」という。漱石と阿具は旧知の間柄でありながら、漱石の転居に関して家主として何ら関与して



硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い実の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、其他に是と云つて数へ立てる程のものは殆んど視線に入つて来ない。書斎にゐる私の眼界は極めて単調でさうして又極めて狭いのである。

其上私は去年の暮から風邪を引いて殆んど表へ出ずに、毎日此硝子戸の中にばかり坐つてゐるので、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐つたり寐たりして其日其日を送つてゐる丈である。

然し私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それが又私に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫等の人を迎へたり送つたりした事さへある。

『硝子戸の中』

scene—14

漱石山房（早稲田南町）

作家の年譜を作成するとき、ちょっとした転居にも気を使いそのことに言及しておきたい気持を抑えることができない。古来、居は気を移すといわれている。作家がある土地に居を構えてひとつの空間に〈住まう〉ことと文学創造との関係あるいはその不可分な重要性を、われわれは暗々裡に承認してしまっているからなのであろうか。

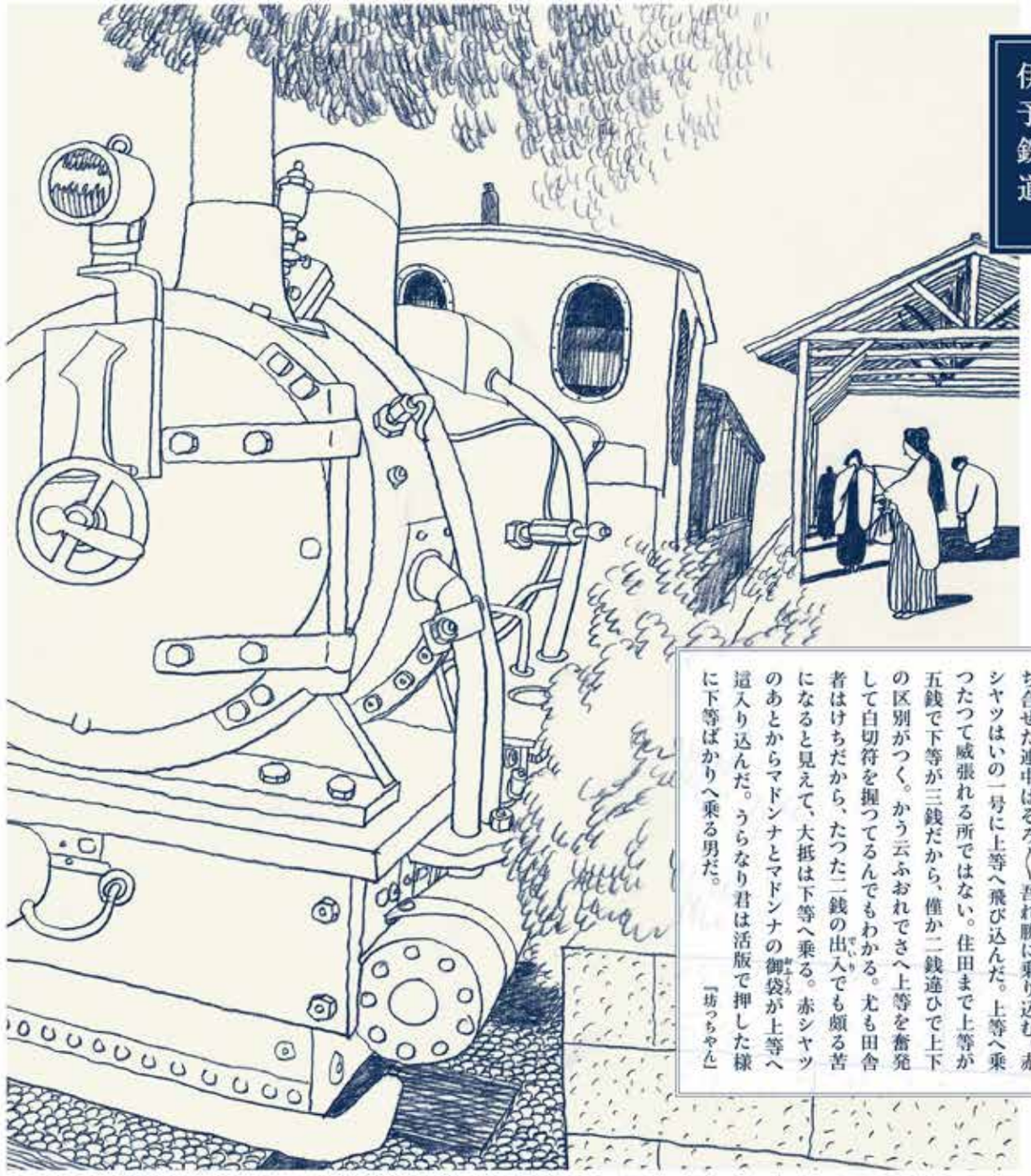
漱石の場合、英国留学から帰国し東京に落ち着いたのち、教師生活を経て本格的な文筆生活に入り、その死を迎えるまでの約十数年の間に、三度住居を変えている。そのなかで、三番目の牛込区早稲田南町七番地（現、新宿区早稲田南町七番地）の漱石山房が最も長くかつ重要であったことはいうまでもない。二番目の本郷西片町の借家は、東京朝日新聞入社第一作として『虞美人草』の大部分が書かれた記念すべき家なのだが、家主との折り合いがつかず、わずか九か月で出てしまう。この二階建の家に〈住まう〉ことが漱石文学に及ぼした影響は、他のふたつに比したときそれほどのことではないが、ただ少なくとも、『三四郎』で、皆より早く西片町一〇番地の広田先生の借家に到着した三四郎と美禰子が、二階から白い大きな雲を一緒に眺めながら、初めて親しく口をききあうという名場面はありえなかったといえるかも知れない。

此間は失敬うちの家賃を三十五円にするといふ三十五円ぢやいやだから出る積だどこか好い所はないかね。無暗向不見に家賃を上げる家主は御免だ。御もよりに相当なのを御聞及なら一寸しらせてくれ玉へ

（明治四十・九・二付　菅虎雄宛）

家賃値上げの話があったとき、漱石が何かにつけて頼りにしていた菅虎雄にまっ先に相談をもちかけた書簡である。西片町一帯は、元福山藩主阿部伯爵家の所有地を住宅地にしたもので、学者町として知られる閑雅な土地であった。一高・東大へは便利だが、風呂がないうえに二十七円→三十円→三十五円という矢継ぎ早で理不尽な家賃改定を考えると、本郷界隈にこだわる必要はまったくなかった。出ると覚悟したら漱石の実行は早く、『虞美人草』がまだ連載中にもかかわらず、九月二十九日の日曜日に早稲田南

scene——24
伊予鉄道



やがて、ビューと汽笛が鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろ〳〵吾れ勝に乗り込む。赤シヤツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れる所ではない。住田まで上等が五銭で下等が三銭だから、僅か二銭違ひで上下の区別がつく。かう云ふおれでさへ上等を奮発して白切符を握つてるんでもわかる。尤も田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でも頗る苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シヤツのあとからマドンナとマドンナの御袋が上等へ這入り込んだ。うらなり君は活版で押した様に下等ばかりへ乗る男だ。

『坊っちゃん』

坊っちゃん

関 東を中心に政府の保護政策を受けて発展した民営の日本鉄道会社に刺激され、イギリスのヴィクトリア朝さながらの鉄道ブームが全国各地に起こった。松山の実業家小林信近も伊予鉄道を設立、明治二十八(一八九五)年にドイツ・クラウス社製の機関車(動輪直径六八五ミリメートル)を購入、軌間六七二ミリメートルの軽便鉄道を松山―道後間に開業、さらに延長し全長四十三キロメートルを完成した。松山市民にとって、その「マツチ箱のやうな汽車」は文明開化の尖端として愛された。現在「坊っちゃん機関車」として保存されている。

scene——25
道後温泉

おれはこゝへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めて居る。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉丈は立派なものだ。折角来たもんだから毎日這入つてやらうと云ふ気で、晩飯前に運動旁出掛る。所が行くときには必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。此手拭が湯に染つた上へ、赤い縞が流れ出したので、一寸見ると紅色に見える。おれは此手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げて居る。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云ふんださうだ。どうも狭い土地に住んでるとうるさい者だ。

『坊っちゃん』

『坊っちゃん』の背景に道後温泉のことが「住田の温泉」として使われていることはよく知られている。しかし漱石にとっては、必ずしも愉快ではなかった松山での生活の唯一の楽しみの場所として大いに意味があった。温泉づき合いをした俳友高浜虚子は、「彼は学校をすませて帰ると手拭を手にして早速此の温泉に出掛けた。日曜日などは石手川から石手寺あたりを散歩して其足で此温泉に浸つた。彼が此温泉に浸る時の心持は極めて純な清い静かなものであつた。(中略)『自分は此温泉あればこそ此地に留るのだ。』彼は温泉の中に浸り乍らさう考へた。」(『伊予の湯』[*22])と書き、さらに道後温泉での至福の時を、その後二度と体験しえなかったのではないか、と推測している。これは、漱石の言動を身近に目撃した者のみがよく言い得る核心をついたことばであろう。そう考えると、学校という小社会全体にはびこっている欺瞞や狡知にたえず癇癪を爆発させ、事なかれ主義に対して敢然とたち向かう江戸っ子青年教師坊っちゃんの爽快な活躍の根源的理由が、逆に見えてくる。

scene——39

赤門

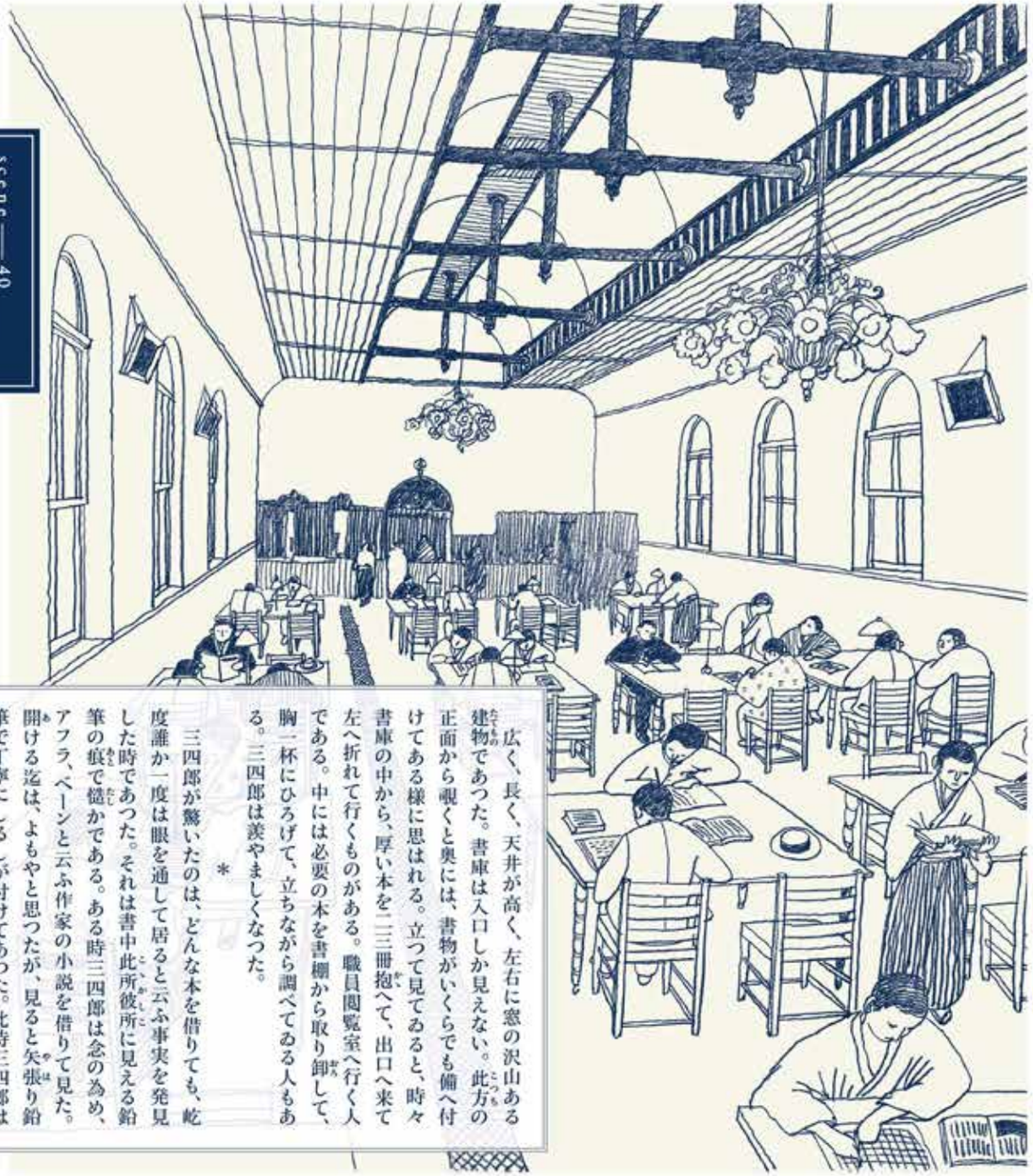
非常に静かである。電車の音もしない。赤門の前を通る筈の電車は、大学の抗議で小石川を回る事になつたと国にある時分新聞で見た事がある。三四郎は池の端にしやがみながら、不図此事件を思ひ出した。電車さへ通さないと云ふ大学は余程社会と離れてゐる。

【三四郎】

幕府瓦解後、明治政府によって上地された大名屋敷のたどった運命はさまざまなものがある。しかしその大半が「敷地規模を変えず公共施設（官公庁、大使館、軍事施設、教育・文化施設）に転じたり、京都から移った公卿出身の華族や新政府の重臣の屋敷となった」（陣内秀信〔*32〕）ことは意外に知られていない。そしてそれらは、他国に類をみない近代都市形成の中心となっていった。明治初期の地図で本郷界隈に目を向けると、現在の東大付近は、文部省用地、東京府用地、陸軍省用地によって大きく分割されているのが分かる。なかでも広大な旧加賀前田侯の上屋敷が、のちに東大のキャンパスとなっていったことは有名である。その東大を象徴する赤門は、文政十（一八二七）年、第十一代将軍徳川家斉の娘溶姫が、藩主前田斉泰に嫁したときに建てられた御守殿門である。本郷六丁目に西向きに面していて、朱塗りであることから「赤門」といわれた。中央に大きな門、シンメトリカルに畳出唐破風造の両番所があり、両袖は海鼠壁の典雅荘重な建物で、現在は重要文化財に指定されている。

scene——40

東大図書館



広く、長く、天井が高く、左右に窓の沢山ある建物であつた。書庫は入口しか見えない。此方の正面から覗くと奥には、書物がいくらでも備へ付けてある様に思はれる。立つて見てゐると、時々書庫の中から、厚い本を二三冊抱へて、出口へ来て左へ折れて行くものがある。職員閲覧室へ行く人である。中には必要の本を書棚から取り卸して、胸一杯にひろげて、立ちながら調べてゐる人もある。三四郎は羨やましくなつた。

＊

三四郎が驚いたのは、どんな本を借りても、屹度誰か一度は眼を通して居ると云ふ事実を発見した時であつた。それは書中此所彼所に見える鉛筆の痕で慥かである。ある時三四郎は念の為め、アフラ、ベーンと云ふ作家の小説を借りて見た。開ける迄は、よもやと思つたが、見ると矢張り鉛筆で丁寧にしるしが付けてあつた。此時三四郎はこれは到底遣り切れないと思つた。

【三四郎】

週四十時間の講義を聴いていた三四郎は、与次郎から「活きてる頭を、死んだ講義で封じ込めちゃ、助からない」と忠告され、講義を半減して図書館通いをする。引用中の「アフラ、ベーン」は、のちに広田先生宅で話題となる『オルノーコ』（一六九八）の作者。物語の展開上、伏線となっているものだが、漱石くらいしか読みそうもない十七世紀の女流作家の唐突な出現は、何となく創作のにおいがする。それにしても、初心な青年の目に偶然触れたこの作家が、実は「女性解放の先駆者として、奴隷解放運動の予知者として、また自由結婚の主唱者として、ルソーの先覚者として、イギリス小説の数々の技法の創始者として……十七世紀に比類のない地位を占めている〔*33〕」人物だったとは一体どういうことか。作者漱石のペーン認識がそこまで到達していたかどうかは別として、それは名古屋で泊まった女や自殺した女に次いで驚異＝脅威を与える女性存在の記号である。「ヘーゲルの講義」の書き込みから透視できる学問批判と同様、漱石が意識的に仕掛けた〈知〉の危険な爆弾のように思われる。

代助は此嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合せた様な一種の人物である。わざ〳〵佛蘭西にゐる義妹に注文して、六づかしい名のつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四五人で裁つて、帯に仕立てゝ着て見たり何かする。後で、それは日本から輸出したものだと云ふ事が分つて大笑ひになつた。三越陳列所へ行つて、それを調べて来たものは代助である。

『それから』

scene——44
三越陳列所

それから

三越陳列所は、日本橋駿河町にあった三越呉服店の俗称。江戸享保年間に創業された呉服の老舗越後屋の後身三井呉服店が、明治三十七(一九〇四)年、営業方針の近代化を図り、明治四十一年西洋風ルネサンス式三階建の新社屋完成とともに、それまでの座売り制を改めて陳列場を設けて販売したことからそう呼ばれる。二十八間に及ぶ大陳列窓と絵にあるような販売方法は、現在のデパートに一歩近づいている。代助が、外交官に嫁いだ姉から送られてきた「舶来品」を調べることができたのもそのためである。

代助は電車に乗つて、銀座迄来た。朗かに風の往来を渡る午後であつた。新橋の勧工場を一回して、広い通りをぶら〳〵と京橋の方へ下つた。其時代助の眼には、向ふ側の家が、芝居の書割の様に平たく見えた。青い空は、屋根の上にすぐ塗り付けられてゐた。

代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調へた。其中に、比較的高い香水があつた。資生堂で練歯磨を買はうとしたら、若いものが、欲しくないと云ふのに自製のものを出して、頻に勧めた。

『それから』

scene——45
新橋風景と帝国博品館勧工場

明治三十六(一九〇三)年八月、東京で最初の市電である東京電車鉄道が新橋―品川間の運転を開始する。そして翌年三月までには、品川―上野―浅草間の循環路線が完成、それまでの鉄道馬車の交通にとって代わった。一方、相前後して東京市街鉄道・東京電気鉄道の二社も独自の路線を開拓し都心部の交通網は一段と整備されていった。のち三社は合併して東京鉄道となり(賃金は全線四銭均一)、三ツ巴の経営競争に終止符が打たれ、さらに明治四十四年八月に東京市に買収される。神楽坂近辺に住んでいた代助は、多分合併直後の田街鉄に乗り、飯田橋から須田町を経て新橋まで来たに違いない。帝国博品館は、京橋区南金六町(現、中央区銀座八丁目)にあった勧工場。中小商工業者の共同販売場で、今日のデパートに近い。少年時に利用したことのある清水一[*35]によると、外見は三階建だが階段はなく、スロープ式の廊下(上りきるとやがて下り勾配となり出口に出る)の両側に小間物屋や玩具屋が並んでいた。伊藤為吉の独創的な設計で明治三十一年の竣工、その時計塔とともに新橋の名所であった。